2025年7月13日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

若い日々を超えた信仰

［民数記11章1～15節］

民は主の耳に達するほど、激しく不満を言った。主はそれを聞いて憤られ、主の火が彼らに対して燃え上がり、宿営を端から焼き尽くそうとした。民はモーセに助けを求めて叫びをあげた。モーセが主に祈ると、火は鎮まった。主の火が彼らに対して燃え上がったというので、人々はその場所をタブエラ（燃える）と呼んだ。民に加わっていた雑多な他国人は飢えと渇きを訴え、イスラエルの人々も再び泣き言を言った。「誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やにんにくが忘れられない。今では、わたしたちの唾は干上がり、どこを見回してもマナばかりで、何もない。」マナは、コエンドロの種のようで、一見、琥珀の類のようであった。民は歩き回って拾い集め、臼で粉にひくか、鉢ですりつぶし、鍋で煮て、菓子にした。それは、こくのあるクリームのような味であった。夜、宿営に露が降りると、マナも降った。モーセは、民がどの家族もそれぞれの天幕の入り口で泣き言を言っているのを聞いた。主が激しく憤られたので、モーセは苦しんだ。モーセは主に言った。「あなたは、なぜ、僕を苦しめられるのですか。なぜわたしはあなたの恵みを得ることなく、この民すべてを重荷として負わされねばならないのですか。わたしがこの民すべてをはらみ、わたしが彼らを生んだのでしょうか。あなたはわたしに、乳母が乳飲み子を抱くように彼らを胸に抱き、あなたが先祖に誓われた土地に連れて行けと言われます。この民すべてに食べさせる肉をどこで見つければよいのでしょうか。彼らはわたしに泣き言を言い、肉を食べさせよと言うのです。わたし一人では、とてもこの民すべてを負うことはできません。わたしには重すぎます。どうしてもこのようになさりたいなら、どうかむしろ、殺してください。あなたの恵みを得ているのであれば、どうかわたしを苦しみに遭わせないでください。」

 「民は激しく不満を言った」（民数記11:1）。今日のような記事を読むと皆さんはどのような気持ちになるでしょうか？

　私はある意味、慰められます。とても正直だからです。自己中心と言えば本当に自己中心。不平不満のつぶやき。それが神様の耳にも達していて、神様は一度火を送って彼らの宿営を焼き尽くそうとされましたが、モーセの祈りによって火は鎮まったと書いてあります。一件落着です。しかし、それにも拘らずです。またしばらくすると口から文句が出てきます。ひもじくてこのままでは死んでしまう、以前はいろんなものが食べられたのに、今はマナしか降ってこない。勘弁してくれと。10節にはこう書いてありました。「モーセは、民がどの家族もそれぞれの天幕の入り口で泣き言を言っているのを聞いた。」「どの家族も」とあります。食べられなくなる。これは辛いことですね。どの家族もつぶやかなかった家族はいなかったということでしょう。ですから、この時神様に立てられたモーセの苦労や苦悩は大変なものがあったと思いますね。

　私たち、信仰者として生きています。「つぶやきは不信仰です」「いつも感謝しましょう」というのはたやすいです。でも旧約聖書はとても生々しいと思います。彼らの口から出る言葉は、今日の箇所では、泣き言、つぶやきばかりです。とても正直だと思うんですね。

　先週私は、こんなようなことをお話ししました。「私たちは、旧約聖書の民の「末裔」でもあり、既にノアの方舟の時代の滅びや、エジプトの奴隷状態から救い出された者でもあり、その意味では、**「サバイバー」**とも言えるのではないか」と。「サバイバー」とは**「今、生かされている者」**です。「がんサバイバー」という言葉もありますけれども、一度手術を経験し、死なずに済んだ。助けられた命を、今生きている存在。私は、信仰的にも、本当にそうだと思うんです。とっくの昔に神様によって叩かれ、滅ぼされていても仕方がない者なのに、神様の憐みによって、そして私たち、イエス様の十字架によって救い出され、今、主と共に生きているのです。

　新約の時代に生きる者が旧約聖書を読むということは、とても意義深いなぁとつくづく思います。たとえばこの「民数記」は、もとのヘブル語の表題は「荒野にて」だそうです。私たち、救われた者として、サバイバーとして、なお、「荒野の旅」を進んで行くのですね。神様が最後に迎えて下さる時まで、その旅を。

今日ここに集まっている者たちは、（お証しをして下さった中島さんはお若いですが）私も含め、もう人生の夏の時期を超え、秋から冬の時期を過ごしている者であると言えるかもしれませんね。お若い時に信仰を与えられた方も多いと思います。何十年という信仰生活。ある意味、希望に溢れていた青春時代とは違う、色々な人生の困難や挫折も体験している私たちではないでしょうか。けれども、その「荒れ野」を進ませて頂いているからこそ見せていただいている景色、上から降って来る「マナ」、日々の「マナ」がそれぞれにあるのではないでしょうか？

早矢仕宗伯（ひろたか）先生という先生がおられます。多分50代の先生で、アート（絵画）でも信仰を表現している牧師先生なのですが、ＫＧＫの卒業生向けに書かれた文章に目が留まりました。（『キリスト者学生会KGK NEWS』より）

「今の学生の方たちのことを想いながら、学生時代の自分を想い起こし、彼らの姿と重ねたり、比べてみたりしながらいろんなことを考えさせられ、気づかされます。あの頃の自分と比べて今の自分、見た目は変わり果て、気力、体力共に衰えてしまっている。けれどその心、魂は、あの頃と変わらない。いや、それどころか成長しているのだと。しかし、成長と言っても、何かが上手く出来るようになるとか、能力や知力を身に付けるということとは違います。人生長く生きていると、自分が想い描いた理想通りにならない現実を幾度も見せられます。思い通りにならなかったり、失ったりしながら、自らの貧しさに気づかされます。そして、それゆえに天を仰ぐようになります。「みこころが天で行われるように、地でも行われますように。」（マタイ6:10）　ぐっと握りしめた手を開いて、自分の人生をコントロールすることから解放されて、主に頼るようになる。自分を取り囲む恵みの世界に目が開かれて行くのです。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」（マタイ5:3）と言われたお方が、今も生きて居られ、変わらずに私たちの人生に関り、導いておられることの味わいを深めて行くようになるのです。」

いかがでしょうか？私は本当に「アーメン」と思いました。私たち、「昔はよかった」ではありませんよね。自分自身の人生のこともそうですし、教会の歩みもそうかもしれません。昔ももちろん恵みがあったけれども、大事なのは「今」、何を感謝し、どう神様に寄り頼んで生きていくか、ではないかと思います。

イスラエルの民の「つぶやき」って何なのでしょう？私たち、よく言います。「こんな筈じゃなかった」。「以前の方が良かった」。つぶやきはいつだってありますね。でも、私たち、前に進むしかないじゃないですか。若い時代の時を越えて、人生、そう思う通りには行かないなあということを経験しながら、人生を、また信仰の一歩一歩を歩いている私たちだと思います。そして、それはとても尊いことのように思うのです。

私たちは正直に、自分の中にある「つぶやき」、自分の中にある「不信仰」と共存して生きるのです。ヨハネも言いました。「もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない」（ヨハネの手紙一1:8）と。そう、失訳聖書の時代に生きる私たちは、もっと大胆に生きられると思います。何故なら、もうイエス様によって救われているのですから！神様との隔てを作っていた罪は皆処分されているのですから！

旧約の時代はモーセがいてくれました。モーセはどれほど苦しんだことか。けれども、真剣に民のためにとりなしをしました。15節に「自分を殺してください」とさえ言っていますね。凄いやり取りです。そして、私たちには、このモーセにまさる主イエス様がいてくださるのですね！この方は、文字通り、命を張って、私たちと神様の間の和解を成し遂げて下さったお方です。そして、死んだけれどもよみがえって下さって、今、聖霊を通して「見よ、わたしは世の終わりまであなた方と共にいる」（マタイ28:20）と宣言して下さっているお方です。「世の終わりまで」ですよ！

私たちの日々の暮しは、「荒れ野」でも、この方が共にいる「荒れ野」です。そして、この方が真ん中にいる私たちの交わり、教会です。たとえ思わずつぶやくようなことがあっても、文句を言っても、神様は恵みの「マナ」を降らせて下さるんです。これは主の憐み以外ではありませんね。さて、主は今日はどんな「マナ」を降らせて下さるでしょうか？その「天」を、「上」を仰いで共に進んで参りたいと思います。

お祈り致します。